

現代におけるヒューマニティと「環境」の関係について

著者	中村 博生, 渡辺 弘之
雑誌名	学長特別研究費研究報告書
巻	15
ページ	1-6
発行年	2004-06
その他のタイトル	The Relationship between Humanity And "Environment" in These Modern Days
URL	http://hdl.handle.net/10631/604

現代におけるヒューマニティと「環境」の関係について

中村博生¹⁾, 渡辺弘之¹⁾

1) 新潟県立看護大学 (看護基盤科学)

The Relationship between Humanity And “Environment” in These Modern Days

Hiroki Nakamura, Hiroyuki Watanabe

Basic Nursing science, Niigata College of Nursing

キーワード: ヒューマニティ (humanity), 環境 (environment), 郊外化 (Suburbanization)

抄録

本報告では、現代におけるヒューマニティと「環境」の関係について、英語教育の教材開発の視点から、「SARS と各国の対応に関する看護学生の見解」というタイトルで、看護学生が人間と環境についてどのような考え方をもっているのかを分析し、看護学生にとってより望ましい教材の開発を試みた研究を前半で紹介する(研究Ⅰ)。また後半では、社会学的見地から「地方都市の社会学 ―郊外化と地方都市の変化―」と題して、人が住む環境の変遷を分析したものを紹介する(研究Ⅱ)。

まず、研究Ⅰについて述べる。看護学生の英語読解力向上のための教材は、医療に関する専門用語や熟語の意味と発音を学ぶことが可能であることはもとより、英語で書かれていることにより中身が一層読者の興味や関心を増幅すると思われる素材が望ましい。とりわけ SARS に関する一連の新聞報道は、時系列に配置された疫病の流行速度と地域あるいは国、人間に与えるダメージの程度と治療や予防措置、病院における医療従事者の対応の実態と感染者数や死亡人数などの記述が、臨場感を駆り立てながら読者に迫る。そこで 2002 年 11 月頃の発生から 2003 年 7 月頃の終息までの SARS に関する英字新聞の記事の中から、おおよそ掲載順に 16 名の看護学生が特に興味をもつと思われるものを精選し、2003 年の 10 月から 2004 年 1 月までの英語の授業で教材として採用した。学生に課された課題は、記事を読んで今回の破壊的な疫病の流行が人間と環境に何を示唆しているのか、を英語あるいは日本語でレポートすることであった。多くの学生は、地球規模で生じた疫病騒動は、環境を自由に操ろうとした人間の傲慢さへの自然環境の反動とみなしていた。授業における精読(intensive reading)とともに、更なる情報を得ようとする発展的な学習が展開された。

次に、研究Ⅱについて述べる。現在の日本では、至るところでショッピングセンターやコンビニエンス・ストア、ファストフードの店の姿が見られ、どこへ行っても画一的な光景をつくり出している。また高速道路や新幹線、バイパス道路の建設や車の普及率増加によって移動はより簡単になり、地方都市における匿名性が拡大しつつある。こうした変化は地理的

な区分を消失させているばかりでなく、そこに住む人間の生活スタイルから意識構造、果ては犯罪様式までを変えようとしている。現在の地方都市は新たに出現した空間であり、都市社会学で指摘されていたようなアーバニズムの対極として理解することを不可能にさせている。研究Ⅱでは、こうした現象を「郊外化」というキーワードによって分析する。

研究目的

本研究の目的は、研究課題「現代におけるヒューマニティと「環境」の関係について」(The Relationship between Humanity And “Environment” in These Modern Days)を、英語教育と社会学の視点から学際的に論考を行い、研究課題に関する論文を作成することにより「人間のための新しい科学」を展開させることにある。次に各研究の目的について述べる。

研究Ⅰの目的は、次のようである。看護学生のための英語読解の授業では、英語の文法や医療に関する専門用語を習得するためのみならず、英語教材から特に看護学生が興味を示す情報が提供されることが望ましい。そこで、看護学生の英語読解授業において、世界中でおよそ8千人が感染し、およそ8百人が死亡した破壊的な疫病 SARS に関する英字新聞記事が、看護学生にどのような見解をもたせたか、そしてこの記事が教材として効果的であるかどうかを検討することが目的である。

研究Ⅱの目的としては、1. 現在の日本の地方都市を画一化させている変化をどのように定義するか、2. その変化は地方都市の生活と空間をどのように変化させたか、3. それらの変化はポストモダニズム、グローバリズム分析で指摘されている文化変容とどのように関わりがあるのか、といった点を分析の対象とする。

研究方法

共通の研究課題について、それぞれの立場から研究の方向性について討論し、学際的に論考を行う。その後、それぞれが至った結論について分析・検討を行い、共通点や相違点などを確認し研究課題に関するまとめを行う。

研究Ⅰの具体的な研究方法は、次のようである。看護学生のための英語読解授業(English for Special Purposes)では、使用する教材は文法項目や専門用語を学習できることのみにとどまらず、それが看護師を目指す学習者にとって新しく、興味深く、役に立ち、さらには知的興奮を促せる情報を含んだものが好ましい。そこで、教材として The Japan Times に 2003 年 3 月から 7 月までに掲載された SARS 関連の記事の中から学習者が興味をもつと思われる 19 の記事を採用した。学習者は、事前に配布された SARS 関連の記事を、授業で 1 パラグラフずつ朗読して訳し、文法、専門用語、発音、そして書かれている事実などを確認した。書かれていることに関する理解度や意見などをレポートすることが課題として課せられた。これらのレポートから看護学生の「SARS と各国の対応に関する看護学生の見解」を検討し、より効果的な看護学生のための英語学習教材について考察する。

研究Ⅱにおいては、郊外化現象についての文献リサーチ、地方都市における郊外化現象の参考事例(新潟県上越市)について考察する。

結果

研究Ⅰでは、次のような結果が得られた。「SARS と各国の対応に関する看護学生の見解」では、次のような項目が集約された。各国の月毎の SARS による死者数の変遷から判断すると、各国の政府の努力しだいでこの疫病はこれほどの犠牲者を出さずにすんだように思われる。この観点から、学習者は中国が SARS に対して早期に適切な措置を取らなかったことに触れながら、自国民の生命の安全確保よりも、一握りの為政者の観点からの SARS 対策が、結果的に世界からの信頼と自国民からの信頼を失うことになったことを明確に指摘した。結果的に SARS の発症と蔓延を阻止できなかった中国の食肉に関する政策と予防や罹患者隔離に関する政策が、明らかに人為的な「環境」を作り出したこと、そしてその「環境」がもはや人類全ての自然環境ではなく、一握りの権力者の「環境」になっていることをも指摘した。このことからの教訓として数人の学習者は、SARS のウィルスを持っていた源とされるジャコウネコをも含め、人間に食される地上の動物やその他の生命体全てにやさしい地球環境を守って行くことが、結果的に人間の幸せに反映するのではないかと結論付けた。このような議論の中から、看護学生として次に SARS が発症した場合の対策として「新しい疫病に関しての即座の情報開示」や「看護師はまず自分を病気から守る手段を講じてから患者へのケアをすべきである」など7つの項目を挙げている。教材開発の観点から結論付けると、この授業を通して学習者は、SARS がどのような疫病であるかを改めて知り、その発生地、原因、伝染経路、罹患者数と死者数、そして各国の SARS に対する措置を知ることができた。さらに彼らは、独自に SARS に関する情報を新聞記事や雑誌、本などから入手するという広範読みを行った。SARS 関連の新聞記事を読むことにより、英語の文法、専門用語、発音などを学習するのみにとどまらず、新しく興味深い役に立つ、さらには知的興奮を促せる情報を学習できたのではないかと考える。

研究Ⅱでは、主に以下のような結果が得られた。まず、大都市の周辺と考えられてきた地域が徐々に拡大していった結果、「郊外」という空間が誕生してきたこと、そうした空間の利便性はかつて「地方都市」と呼ばれていた地域へと拡大し、地域的な差がほとんど無くなったことが挙げられる。高速道路や新幹線などの普及に加え、自家用車の普及は移動の不便さを解消し、地理的な区分の意味を消失させている。同時に、地方都市では駅前を中心とした商店街コミュニティが衰退化するという共通の特徴がみられる。フェザーストン（フェザーストン、1991）はポストモダン社会を消費社会であるとしているが、地方都市に共通してみられる大規模なショッピングセンターはそうした消費社会の一つのあり方を提示するものである。消費や娯楽を一箇所に集中させることによって、古い地域社会の消費のあり方を一変させ、ショッピングセンターに隣接した住宅地の分譲（「ニュータウン」に象徴される建て売り分譲住宅地）などによって地域社会そのものを大きく変化させている。郊外化現象はさまざまな区分（地理的・時間的）を消失させ、地域社会を一元的な空間へと統合させる。それによって、そこに住む人間の生活スタイルや人間関係のあり方を変える。三浦展は郊外化現象にふれ、ニュータウンに代表される空間に共通の特徴として「共同性の欠如」ということを指摘しているが（三浦、1999）、地方都市はきわめて犯罪が発生しやすい空間であるということが出来る。

考察

研究Ⅰでは、次のような考察がなされた。SARS に関する情報について授業の前に知っていたかを調べるためにアンケート形式で調査した。結果の中で特筆すべきことは、全学習者 16 人中 15 人が、SARS のウィルスとその感染源とされる動物について知識を持ち合わせていなかったことである。このことに関する記事を学習した後で看護学生はレポートの中で、人間は食用の動物が自分たちのために存在していることを当然のことと考えていて、食べたい動物はなんでも食べるために殺している。ハクビシンが感染源であるならば、つまり人間のために存在している動物が感染源であるならば、今回の中国での利益のみを追求した節度の無い捕獲、屠殺、販売は、衛生面からいって人間の生命を脅かす源となったことは当然の結果であるとした。また中国政府の予防措置はもちろんのこと検査、入院、治療、隔離、さらには情報公開などの対策が全て後手となったことへの厳しい批判をしていた。つまり、一握りの権力者が個人を無視した政策を採ることが、ひいては世界中の人間に不利益をもたらすことを指摘した。この英字新聞記事による英語学習をとおして、学習者は、未知なる情報を英語で読み解きながら、必要に応じて参考文献を求めて事実関係の確認を行い自分の考えをまとめ、将来仕事を行う上で疫病に対する基本的な考えを築き上げたことは、きわめて重要であると考える。以上のことより、この教材が看護学生の英語学習教材として有効であるというごたえを得ることができた。

研究Ⅱでは、次のような考察がなされた。郊外化現象は「消費」と「移動」によって象徴される。かつて地方の地域社会は良くも悪くも「顔の見える」空間であり、相互監視社会であったが、個人の移動性が高まることによって地域社会そのものも解体していった。その結果として地方都市において個人の匿名性は高まり、そうした状況をモニターするために導入されているのが監視カメラである。イギリスでは行政単位で監視カメラの導入を進めてるが、犯罪の発生を人の手ではなく、「記録される」という事実によって防止しようとしている。フーコーの権力論を持ち出すまでもなく、自由社会における権力と監視の関係は「見る」者と「見られる」者によって決定付けられる。ショッピングセンターの明るい店内には至るところに防犯カメラが仕掛けられているが、そうした状況をごく自然に受け入れさせているのは、私たちの社会が人間と人間との関係の不在一すなわち共同性の欠如一を前提として成り立っているということに他ならない。現在の地方都市では生活上の不便さはほとんど無く、便利さと快適さに満ちている。しかし、その便利さと快適さに満ちた空間には、様々な問題の文脈が存在しているということが言える。

研究Ⅰと研究Ⅱにおいて、共通項を導き出すとすれば、現代におけるヒューマニティと「環境」の関係の特徴づけるものは、一握りの権力者が利益追求あるいは政権維持のために個人を犠牲にする構図が、人間と自然環境との関係の中でも、好むと好まざるとにかかわらず出現しているということであろうか。自由社会に固執するあまり、便利さと快適さにこだわり過ぎるあまり、人が人を暖かく見守ることや人が自然を我がことのように大切にすることを蔑ろにしてきた現代の風潮を、疫病 SARS の流行や地方都市の犯罪発生の増加がわれわれに警告を発しているのかも知れない。

文献

研究 I

- 1) Nakamura H. Material Development for Nursing Students in English Class — An article in An English Newspaper Focusing on A Foreign Patient—. Journal of Human Studies. 2002; Vol. 5: 5-18.
- 2) The Japan Times. Experts try to unlock secret to 'baffling' disease strain. The Japan Times 2003; Monday, March 17.
- 3) The Japan Times. Airports alert as deadly flu strain spreads across globe. The Japan Times 2003; Wednesday, March 19.
- 4) The Japan Times. CDC investigating mysterious illness. The Japan Times 2003; Wednesday, March 19.
- 5) The Japan Times. Outbreak feared in Taiwan. The Japan Times 2003; Wednesday, March 19.
- 6) The Japan Times. THE WHO says malady in China can be treated. The Japan Times 2003; Wednesday, March 19.
- 7) The Japan Times. Three in Japan may have contracted mysterious pneumonia like ailment. The Japan Times 2003; Friday, March 21.
- 8) The Japan Times. Virus suspected in killer disease. The Japan Times 2003; Friday, March 21.
- 9) The Japan Times. Singapore quarantines hundreds to curb virus. The Japan Times 2003; Thursday, March 27.
- 10) The Japan Times. Mystery illness spreads. The Japan Times 2003; Thursday, March 27.
- 11) The Japan Times. H.K. health scare boosts business. The Japan Times 2003; Thursday, March 27.
- 12) The Japan Times. SARS deaths leap in Hong Kong as crisis deepens. The Japan Times 2003; Thursday, April 17.
- 13) The Japan Times. China seeks to restore trust lost in SARS coverup. The Japan Times 2003; Thursday, May 1.
- 14) The Japan Times. Taiwan brass insist worst of SARS crisis has passed. The Japan Times 2003; Thursday, May 29.
- 15) The Japan Times. SARS nixes Guangdong culinary tradition. The Japan Times 2003; Thursday, May 29.
- 16) The Japan Times. WHO announces SARS contained worldwide. The Japan Times 2003; Monday, July 7.
- 17) The Japan Times. Being prepared for SARS. The Japan Times 2003; Tuesday, November 11.
- 18) The Japan Times. Japan free of SARS: Sakaguchi. The Japan Times 2003; Sunday, May, 25.

- 19) The Japan Times. SARS impact on Kansai economy 'not great'. The Japan Times 2003; Thursday, May 25.
- 20) The Japan Times. WHO announces SARS contained worldwide. The Japan Times 2003; Monday, July 7.
- 21) The Japan Times. China reveals first suspected case of SARS in six months. The Japan Times 2003; Monday, December 29.

研究Ⅱ

- 1) Featherstone, Mike (1991) Consumer Culture and Postmodernism. London : Sage.
M. フェザーストン, 川崎賢一・小川葉子編著訳, 池田緑訳『消費文化とポストモダニズム』恒星社厚生閣;1991.
- 2) 三浦展. 「家族」と「幸福」の戦後史—郊外の夢と現実—. 講談社現代新書;1999.
- 3) 中村陽一. 都市のネットワーク. 岩波講座・現代社会学第 18 卷『都市と都市化の社会学』岩波書店. 1996.
- 4) Ritzer, Geoge. (1998) THE MCDONALDIZATION THESIS :EXPLORATIONS AND EXTENTIONS, 1st edition, Sage Publications Ltd., ジョージ・リッツァ 正岡寛司監訳. マクドナルド化の世界—そのテーマは何か?—. 早稲田大学出版部;2001.
- 5) 総務省統計局・統計研修所編, 日本の統計. 日本統計協会;2003.